

P-39

頸椎手術後の愁訴に対して桂枝茯苓丸が有効

であった1例

大田原赤十字病院・整形外科

○吉田祐文、松村崇史

【緒言】整形外科領域では、手術後の愁訴の治療に難渋することも多い。われわれは、頸椎手術後の愁訴に対して桂枝茯苓丸の投与が有効であった症例を経験したので報告する。

【症例】平成3年頃に歩行障害で発症し、平成8年3月に当科を紹介され受診し、頸椎後縦靱帯骨化症と診断された47歳の女性である。その後、巧緻運動障害が出現し、歩行障害も悪化したため、平成9年8月に脊柱管形成術を施行された。演者が担当となった平成10年4月の時点では、四肢に疼痛・しびれ・冷感はないものの、つっぱり感があり、巧緻運動障害と歩行障害は残存しており杖を使用していた。

平成11年11月から上肢のしびれと冷感が出現したが、画像検査、神経学的検査では明らかな異常はなかった。演者は漢方に関しては全くの素人であるが、同年10月に日本疼痛漢方研究会の投稿を終え、12月に日本東洋医学会の抄録を書き上げたところであり、本症例のような術後の愁訴に対しては、漢方学的アプローチが適していると考えていた。ずんぐりむっくりとした体型で、そこそこの体力があり、左の下腹部に圧痛があることより、実証で瘀血があると判断して平成11年12月から桂枝茯苓丸の投与を開始した。しびれと冷感は早期より軽減し、Visual Analogue Scaleでは平成12年1月には28%、2月には42%、6月には92%の改善を認めた。3月からは夜間に強い両下肢痛が出現したため芍薬甘草湯を併用したが効果に乏しかった。平成12年12月には上肢症状はほぼ消失していたが両下肢の疼痛・はり・冷感が強かった。気虚を認めたため補中益気湯のみの処方としたところ、2週間後には下肢の疼痛とはりには少ないながら効果を認めたが、上肢のしびれが再燃した。瘀血は認めなかったが桂枝茯苓丸を補中益気湯に併用して投与を再開したところ、2週間後には上肢のしびれは消失した。平成13年6月現在も桂枝茯苓丸と補中益気湯を投与しており、上肢のしびれと冷感は認めていない。

【結語】頸椎手術後の愁訴は多彩であり、西洋学的なアプローチのみでは治療に難渋することも多い。われわれ整形外科医は積極的に漢方学的なアプローチを取り入れるべきであると考えらる。